

かつて、芥川龍之介が〈三つの寶〉という子供向けの大きな本をつくりました。

残念ながら本のできあがったときには芥川はこの世にはいませんでしたが、そのあとがきに、昭和二年十月、小穴隆一という方が記しています。

「あなたがたは あなたがたの 一番仲のいいひと、一番好きな方がたと、御一しょに、この三つの寶 を御覧になりませうが、この本は、芥川さんと私がいまから三年前に計画したものです。私達は一つの卓子のうへにひろげて 縦からも 横からも みんなが首をつつこんで読める本をこしらへてみたかつたのです。(中略) この本をお読みになる方がたは、はじめ私達が考へてみましたやうに、みんな仲よく首をつつこんで御覧になつて下さい」

〈三つの寶〉は閉じた状態では大人の胴体幅ほどの大きさがあります。開けば子供が四方から一緒に読めます。挿絵は一枚ずつ貼付され、天は金色に染められた、特別上等な本です。通常、読書はひとりひとりが言葉を心に起こしていく個人的な体験です。ですが、この本を知ってから、〈同時に複数人が共有する読書〉というイメージが私に宿りました。

さて。

私はいつもひとりで豆本をつくっています。ちいさな本を開く「そのひとのためだけの言葉を届けたい」という気持ちがあります。言葉は夜に灯る火です。それは大切なものです。ただ、〈ひとり〉がさみしいような気持ちになることもあります。

さらに。

私は極端なことが好きです。展示というものをしてみるならば、〈ちいさいもの〉〈ひとりの心に落ちるもの〉の極側にある〈大きなもの〉〈誰かと共有できるもの〉をつくってみたいと考えました。

そこで。

テーブルの上からおはなしを飛び出させて、みんなで共有できる読書体験をつくれなにかと思いました。

そして。

〈ふたり展四十雀〉は、ギャラリーチフリグリでの出会いのご縁から生まれました。鳥のかわいらしさと野生味を両立させたすばらしい絵を描く、すずき恵さん。ひとをつなぐ愉快的なギャラリーオーナーいのうえ佳代子さん。〈歩いて読む本〉をつくってみたい。そのためにアイディアを寄せ合い広げ合い、手間を惜しまず、できるかぎり思いつくかぎりの装丁を部屋へほどこす展示です。本屋さんには並べられないくらいの、もしかしたら世界一大きな本かもしれません。遊びにきていただいた方には、みんな仲よく思い思いに歩いてご覧になっていただけましたらとてもうれしく思います。(かくら こう)

かくら こう

<https://www.kakura-ohanasicafe.com> twitter@ohanasi\_cafe(diary)

2011年5月 twitter@ohanasitecho 〈おはなし手帖〉にて140字のおはなしの発信をはじめ。

以降、〈一冊の本にひとつの形〉をつくるひとり出版室 〈おはなしの喫茶室〉として、文学フリマ・zine 展 in Beppu などイベントへ出展参加。HP サイト上・minne にて手製本の販売。